

27 28 29 30

鹿児島県青少年国際協力体験事業
30周年記念誌



目 次

30回の歩みと未来への一歩へ..... 1

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場秋信

お祝いのことば..... 2

鹿児島県知事 塩田康一

独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局長 橘秀治

事業の概要..... 4

事業の実績..... 5

年次別派遣実績

参加団員年齢分布／市町村分布

第1回～30回の足跡..... 7

(体験事業参加 OB,OG からの寄稿)

松崎勝利 9

寺師慶太 9

徳永（三浦）絹代 11

山之内卓也 11

濱田孝子 13

貴島祐 15

西嶋（川崎）温子 17

江崎（田邊）優子 19

村方直己 23

山元（山之内）真恵 27

上川路太雅 29

川畑知穂 31

渡辺博人 33

金（平石）敬乃 33

西田愛香 37

八木真理奈 41

久保友佑 45

上田尚佳 45

三浦若葉 47

久保佑太 49

山内麻未 51

榎屋夢 51

得永美潤 53

福田正宗 55

岡田綾香 57

渡邊望未 58

久保田紗那 61

(報告書アート作者)

田畑梓 21

奈良迫ひかる 21

豊留春菜 25

今村安里 25

崎野ほのか 39

山本珠子 39

上之門優里 39

今別府幸芽 59

岩田胡桃 59

園田春陽59

(挿絵) 宮園広幸 (JOCV OB)

(資料) アジア30年の変化..... 62



30 回の歩みと未来への一歩へ

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓場 秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

それは約 35 年前、鹿児島県国際交流課より県下自治体国際交流担当者会議において「青年海外協力隊」の紹介依頼があり当時県 OB 会会長の私が伺い話をした。その時の参加者は、協力隊事業の内容はもちろんのこと、名称さえも知らない人が殆どであった。また開発途上国に対する理解不足と偏見を感じ、それらに資するには、と閃いたのが本事業である。

鹿児島県と JICA の協力を得、県青年海外協力隊を支援する会、県協力隊 OB 会、県国際交流協会 3 団体による実行委員会を組織し、多くの人が広域から応募可能な参加費、協力隊員の活動現場視察、派遣国での同世代との交流、異文化体験（ホームステイ）、マスコミ同行取材による広報、協力隊帰国隊員の活用を主眼に事業の具体化を進めた。

平成 3 年（1991 年）3 月、105 名の応募者から 2 回の面接を経て選ばれた中高生 10 名を、現地語学習・青年海外協力隊事業概要理解・日本鹿児島を知る・現地生活様式等を学ぶための事前研修を経て、複合民族国家マレーシアに派遣した。首都クアラルンプールからボルネオ島サバ州に移動し、青年海外協力隊員の活動現場サリマンドゥ村での 4 日間のホームステイ。異文化の中での厳しい生活環境や言語の壁を乗り越え現地に溶け込み変化・成長していく団員の姿に、本事業の手ごたえを感じた。以来マレーシア、インドネシア、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、スリランカの 7 ヶ国に、376 名の中高生を派遣した。

事業実施に当たり毎年実行委員会で、派遣国の決定と予算の検討を行った。派遣国は、治安を最優先しながら協力隊員が活動している東南アジア諸国、中でも鹿児島県出身の協力隊員が活動している国を第一候補とした。次にホームステイ先は、毎回最も時間と労力を必要とした。旅行業者提案のホームステイ先では本委員会が求める成果を得るのは難しい、との判断で自からホームステイ先候補の情報を、派遣中の隊員や帰国隊員、鹿児島在住の外国人から収集し紹介先と直接コンタクトした。ある時は、鹿児島を訪問のマレーシアタイピン市市長、鹿児島でレストランを経営するスリランカ店主が、ホームステイ先の確保と現地受け入れの準備をしてくれた。

次に収入の確保である。当初は県と JICA そして実行委員会で補ったが、第 6 回目からは県と JICA に代わり、事業の共催先を一部市町に求め乗り越えた。しかし、物価と諸経費の上昇そして派遣団員の増に対応するため、新たな収入源と事業の広報を兼ねて第 14 回より民間企業にも協賛をお願いし、今日に至っている。

この事業は、参加者自身の成長もさることながら、家族からも高い評価を得ている。一家族から兄妹 3 人参加が 3 組、親子 2 代参加が 2 組など。また団員の進路先を見ると、青年海外協力隊への参加、外国の大学進学、社会的弱者への支援を視野に入れた教育、医療・保健分野への進路等、本事業での学びが新たな扉を開かせている。

結びに、国際協力への理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としている本事業が、今後とも多くの皆様の支援の下、鹿児島の国際化に貢献することを願ってやまない。



祝 辞

鹿児島県知事 塩田康一

このたび、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」が30回の節目を迎えられたことを、心からお祝いを申し上げます。

これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、「県青年海外協力隊を支援する会」、「県青年海外協力隊OB会」、「県国際交流協会」の3団体で組織する実行委員会の皆様や関係者の御支援・御尽力の賜であり、心から敬意を表します。

鹿児島県内の青少年がアジアの国々を訪問し、国際協力や異文化を学ぶ本事業において、平成3年3月、マレーシアへの訪問団10名の派遣を皮切りに、これまで376名もの青少年を、延べ7カ国に派遣し、青年海外協力隊員の活動現場の視察や活動体験を実施されております。

鹿児島が将来にわたり発展していくためには、人口が増加し、経済成長が著しいアジアに近いという地理的特性を生かして、これらの地域とつながり、貿易・投資交流、人的交流を促進していく必要があります。

そのためには、鹿児島の魅力を世界に発信し、海外の人々と交流・共生できる人材の育成が必要であり、青少年の時期から、海外の自然や、文化、産業などに触れながら、その土地の人々と直接交流する機会を増やすことが重要であると考えております。

本事業が、今後とも末永く継続され、多くの青少年が、国際協力の意義や異文化理解の大切さなどを実体験として学び、国際感覚豊かでグローバルな視点を持った人材として成長し、鹿児島のみならず国内外の広い世界で、大いに活躍されることを期待しています。

終わりに、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますの御発展と、皆様の御健勝・御活躍を祈念いたします。



世界の架け橋へ、 国際性を備えた青少年の育成を

独立行政法人国際協力機構

青年海外協力隊事務局長 橘 秀治

鹿児島県青少年国際協力体験事業が 30 回目の節目を迎えたこと、心よりお喜び申し上げます。

これも事業開始当初よりご尽力頂いている弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者のご支援・ご協力の賜物であり、心から敬意を表します。

本事業は鹿児島県内の青少年を開発途上国に派遣し、現地の JICA 海外協力隊員の活動視察や体験、また、ホームステイや学校交流等を通じて、国際協力や異文化理解等を深めることを目的とした事業であり、これまで県内 376 名の青少年育成に大きく貢献されてきた重要な取組です。JICA 海外協力隊 OB/OG の皆さんがこの取組みに貢献してきたことを誇りに思います。

現在、世界は複合的危機の中にあります。気候変動、感染症の拡大、資源価格の高騰、政情不安など全てが関連しています。世界と繋がっていなければ生きていけない日本にとって、この危機は他人事ではありません。世界には様々な国や文化があり、多様な人々が暮らしていることを理解し、国際協力を推進することが様々な危機を乗り越えていく第一歩になります。

また、国内に目を転じれば、日本では少子化・高齢化が進み、外国人受け入れ環境の整備や多文化共生社会の構築が待ったなしです。新しい時代に向けた日本の社会づくりが進む中で、世界と日本を繋ぎ、日本の地域社会にも貢献できる人材の育成が急務になっています。

このような状況下、中学生・高校生が開発途上国を訪れ、その国の文化や社会、国際協力の現場を実際に自分の目で見て、感じて、考えることは非常に重要です。これからもこの取組を継続して頂き、国際性を備えた青少年が世界の架け橋となっていくことを期待しております。また、そのような経験を積んだ多くの若者が JICA 海外協力隊にも参加してくれると嬉しいです。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますのご発展と、関係者の方々の御健勝・御活躍を祈念致します。

事業の概要

1 趣旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、ホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深めるとともに、現地で途上国の国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を通して、国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し、地域レベルでの国際化に寄与する。

2 事業主体

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

（構成団体） 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会（事務局担当）

3 共催

趣旨に賛同し、青少年の派遣を希望する県内の市町村等

4 後援

鹿児島県、鹿児島県教育委員会、独立行政法人国際協力機構九州センター

5 協賛

県内企業・団体

6 派遣対象国

東南アジアの発展途上国

7 派遣期間

概ね7泊8日間

8 派遣時のプログラム内容

- （1）青年海外協力隊員やNGOの活動現場視察
- （2）ホームステイ及び現地住民との交流会
- （3）現地の学校訪問交流 など

9 派遣人員

県内の中学生・高校生（高専3年生までを含む）15人程度
（ほかに、4人程度の引率者、2人程度の報道関係者が同行）

10 付帯プログラム

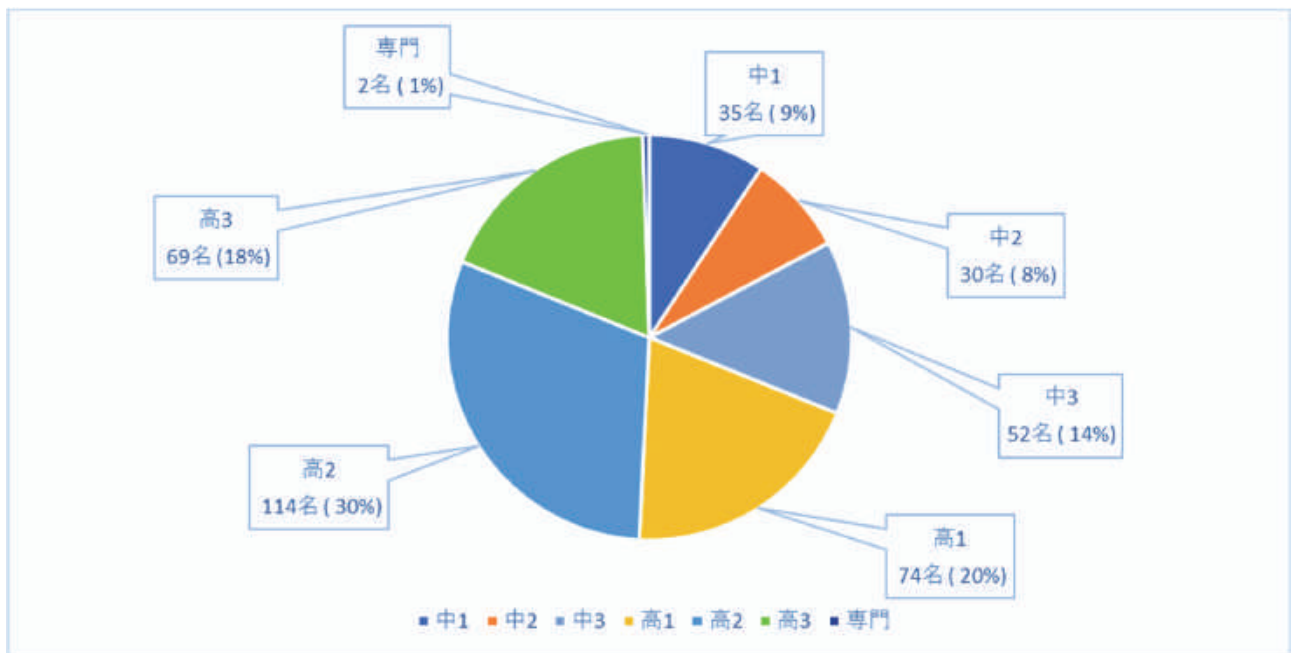
事前研修／帰国後の報告会／報告書作成配布

年次別派遣実績

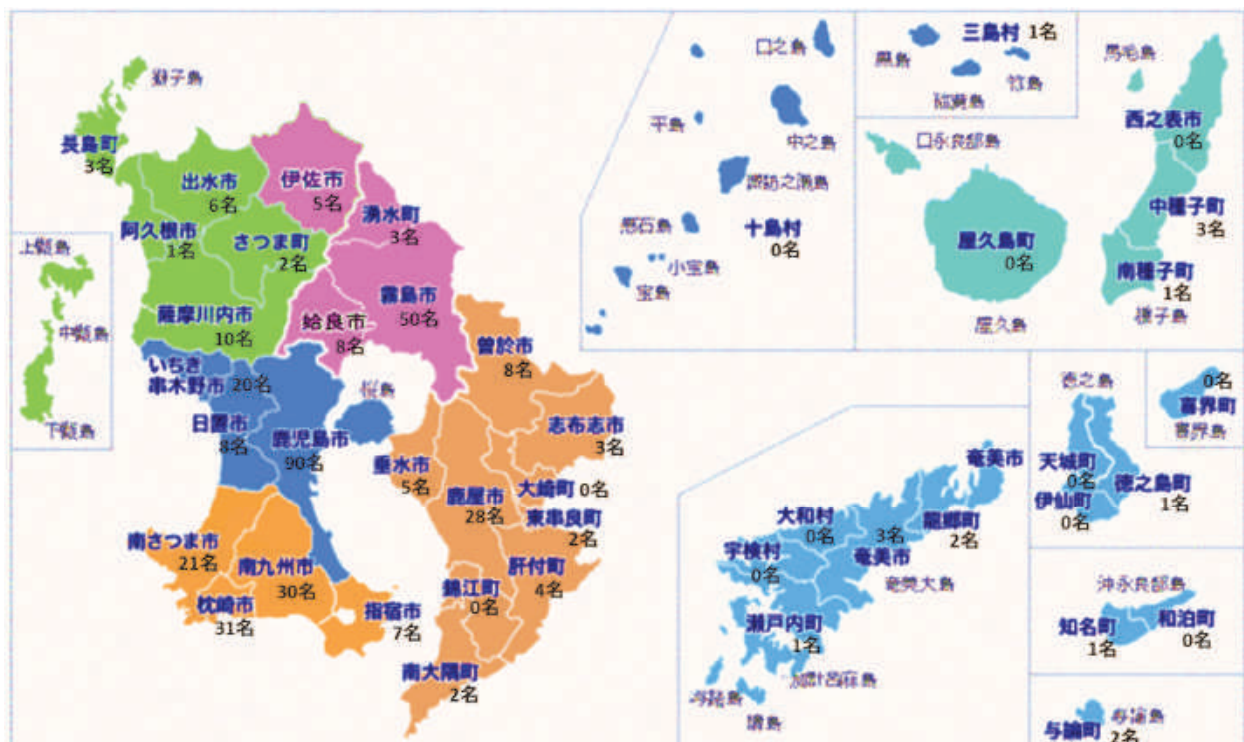
	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (クアラルンプール、マリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、伊集院町、祁答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア (クアラルンプール)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、隼人町	公募
第3回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、志布志町、高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン、パナラガリ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、菱刈町、霧島市	公募
第5回	マレーシア (クアラルンプール)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市、国分市、瀬田町、宮之城町、隼人町、吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア (クアラルンプール、バリンタラ)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、郡山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、始良町、蒲生町、溝辺町、横川町、栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ (バンコク、ムアン)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (バンコク、ムアン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン、フナム)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、祁答院町、溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン、フナム)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市、串木野市、枕崎市、国分市、垂水市、溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (予定:ナコンパノム)	平成15年度 SARS 及び 鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ、トロンガ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市、枕崎市、国分市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ、ホーチミン、フナム)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ、トロンガ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ、ホーチミン、フナム、クワン省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県、ソムン村)	平成20年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県、ソムン村)	平成21年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシヤ、パナラガリ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ、トロンガ州)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン市、フナム、クワン省、フナム村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナ市、フナム市)	平成25年 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン、カンボジア)	平成26年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン、カンボジア)	平成27年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン県、ソムン村)	平成28年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス (ビエンチャン県、ソムン村)	平成29年 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ (西部州、ガンパハ)	平成30年 7/25(水)～8/1(水) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、南九州市、南さつま市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第28回	カンボジア (プノンペン、カンボジア)	令和元年(2019) 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第29回	ラオス	令和2年(2020) コロナにより中止	0名 (0)		
第30回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	令和5年(2023) 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、南九州市、南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計7カ国	計(376) 平均13人			

参加団員年齢分布／市町村分布

参加団員の年齢分布



参加団員の市町村分布



第1回～30回の足跡



（体験事業参加 OB,OG からの寄稿）

松崎勝利 9	寺師慶太 9	徳永（三浦）絹代 11
山之内卓也 11	濱田孝子 13	貴島祐 15
西嶋（川崎）温子 17	江崎（田邊）優子 19	村方直己 23
山元（山之内）真恵 27	上川路太雅 29	川畑知穂 31
渡辺博人 33	金（平石）敬乃 33	西田愛香 37
八木真理奈 41	久保友佑 45	上田尚佳 45
三浦若葉 47	久保佑太 49	山内麻未 51
榎屋夢 51	得永美潤 53	福田正宗 55
岡田綾香 57	渡邊望未 58	久保田紗那 61

（報告書アート作者）

田畑梓 21	奈良迫ひかる 21	豊留春菜 25
今村安里 25	崎野ほのか 39	山本珠子 39
上之門優里 39	今別府幸芽 59	岩田胡桃 59
園田春陽 59		

（挿絵）宮藺広幸（JOCV OB）

第1回

平成3年（1991）
3/27(水)～4/3(水)

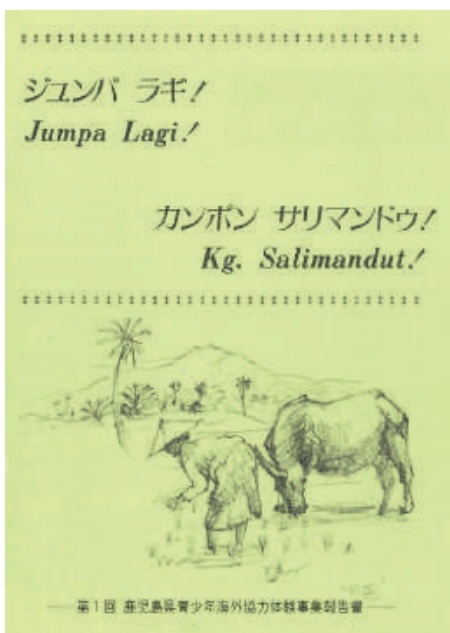
マレーシア（コタキナバル、サリマンドゥ）

〔派遣団員〕

大浦地 拓生	伊集院中学校
加藤 心	内之浦中学校
関 真知子	祁答院中学校
寺師 慶太	鹿児島中央高等学校
湊原 政彦	鹿屋農業高等学校
山口 正也	市来農芸高等学校
松崎 勝利	阿久根高等学校
坂口 晶子	鹿児島東高等学校
小西 恵子	鹿児島純心女子高等学校
福永 由美子	大島高等学校
10名	

〔同行者〕

弓場 秋信	青年海外協力隊県OB会会長
吉村 博幸	鹿児島県国際交流協会
西田 健郎	青年海外協力隊県OB会副会長
橋口 和典	青年海外協力隊県OB会事務局長
狩集 尚美	青年海外協力隊県OB会会計
森岡 和之	南日本新聞社社会部
牛尾 純	MBC南日本放送報道制作局報道部



- 3/27 結団式
鹿児島空港発 福岡経由 クアラルンプール空港着
ホテル泊
- 3/28 クアラルンプール空港発 コタキナバル空港着
領事館・協力隊事務所訪問
在サバ州隊員たちによるウェルカムパーティ ホテル泊
- 3/29 サリマンドゥ村（協力隊活動現場）へ移動
協力隊活動に関するオリエンテーション、
村人との交歓会
ホームステイ
- 3/30 ホストファミリーとの対面
各ホームステイ先で農作業等の手伝い
ホームステイ
- 3/31 現地青少年とのサッカーの交流試合
村人たちとキヌモアリ溪流へハイキング
農作業体験
ホームステイ
- 4/1 サヨナラパーティ
サリマンドゥ村→ティナンゴール村
→サバ林業開発公社植林現場視察
コタキナバル空港発 クアラルンプール空港着
ホテル泊
- 4/2 学校訪問
（日本語教育隊員の活動視察及び日本語学生との懇談会）
ホテル泊
- 4/3 クアラルンプール空港発 福岡経由 鹿児島空港着
解団式

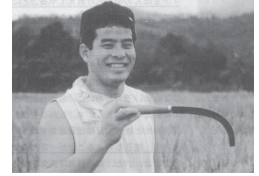


ドラムカン脱穀

松崎勝利（第1回マレーシア派遣）



第一回目の企画でこの事業の気合いの入れ方を感じたのが、マレーシアでも、半島近辺でなく、ボルネオ島の僻地サリマンドゥー村。30年前電気も無い村にホームステイ。断食に、月明かりの水浴びに、カルパオの解体と、驚きと感動の日々でしたが、農家の私の喜びは、ドラムカン脱穀です。30年前でも、日本ではコンバインがあたりまえのなか、お米の脱穀をドラムカンに叩きつける方法、食の原点を見ました。



現在阿久根市で、えのき茸やヒラタケ、原木椎茸を栽培して細々と暮らす農家です。原木椎茸を始めて19年程経ちますが、未だに昔ながらの方法を大事にしながら、栽培しております。

人間の欲望の餌食にされている地球。何でも便利になる一方で、地球環境は悪化していく、私は原木椎茸をずる事で、地域の森と自然と共存している事に、小さいながらも誇りに感じています。目指すは自給自足かな！？今年の5月から、日本蜜蜂を飼いはじめました。これもサステナブルな観点から、友達に誘われて始めましたが、なかなか奥が深く、新たな世界が私の心をワクワクさせています。

地球環境にやさしい、ドラムカンに会いたいものです。それと、木なりのパパイアを現地の人に採ってもらって食べました。未だにあの時の味が口の中に残っていて、あの旨さを越えるくだものに出会っていません。（完）

人生を支える記憶

寺師慶太（第1回マレーシア派遣）



第1回鹿児島県青少年海外協力体験事業参加から早や30年強。高校生だった私も50代が近くなりました。派遣生選考試験挑戦に始まり、本事業で体験した記憶は色褪せず、年齢を重ねるごとに鮮明さが増しています。人生の早い時期に事業体験出来たことが最大の価値であったと考えていて、豊かな体験の記憶は人生を支えるものだ実感しております。

私は1期生としてマレーシア（サバ州サリマンドゥー村）の農村住宅にホームステイしながら、海外協力体験に臨みました。村はサバ州都コタキナバルから車で4時間ほどかかるボルネオ島内陸部に所在し、当時は電気水道も無く、夜はランプ生活、入浴は沐浴（マンディー）でした。村の開発に取り組む青年海外協力隊員に同行し、村民生活を支える簡易水道の保守点検や食生活を支える稲刈り作業に携わりました。機械は無く、村民と共にコミュニケーションをとりながらの手作業でした。協力隊の方の「村民生活に何が必要かを村民と共に考え、具体化していく姿勢が大切」という言葉を記憶しております。



村には子だくさんの家庭も多く、同世代の若者や子どもたちがたくさんいました。人懐っこく、朝から晩まで満面の笑顔で接し、好奇心旺盛に話しかけてきます。朝起きると、寝床のそばには子どもたちが何人も集まり「早く起きて、遊ぼうよ」といった具合です。農作業、サッカー大会や溪流遊び、お互いの母国語を教えあったり、と密度の濃い日々を過ごすなか、自分の心が開放的になり、思考も柔軟になっていった感覚を覚えています。お互いの文化や価値観を尊重し、共に歩み寄る姿勢を体験から学べた私は幸運でした。

その後、事業体験をきっかけに人の教育・モチベーション・キャリアといった分野に興味が湧き、現在社会人としても一貫してこのようなテーマに沿った事業に携わっております。

最後となりましたが、今後も鹿児島の若者が本事業への参加をきっかけとして豊かな人生を過ごして欲しいと祈っております。（完）

第2回

平成4年(1992)
3/27(金)～4/3(金)

マレーシア (スラバ)

〔派遣団員〕

大淵 昇吾	山野中学校
有川 善久	桜丘中学校
長岡 陽子	志學館中等部
大川 志野	南指宿中学校
山之内 卓也	甲南高等学校
島田 守	鹿屋農業高等学校
西本 強志	鹿児島工業高等専門学校
江並 美香	鹿屋高等学校
三島 貴恵	鹿児島中央高等学校
三浦 絹代	鹿児島玉龍高等学校
10名	

〔同行者〕

弓場 秋信	青年海外協力隊県OB会会長
橋口 和典	青年海外協力隊県OB会事務局長
村上 康弘	青年海外協力隊県OB会幹事
馬場 真理	青年海外協力隊県OB会会計
是枝 洋志	鹿児島県国際交流課
前田 昭人	南日本新聞社
崎山 雄二	KTS鹿児島テレビ放送



- 3/27 結団式
鹿児島空港発 福岡経由 クアラルンプール空港着 ホテル泊
- 3/28 JICA事務所訪問
クアラルンプール市内視察 ホテル泊
- 3/29 クアラルンプール→スランペラ
ホストファミリーとの対面式 ホームステイ
- 3/30 FELCRA(*) 職員によるスランペラの概要説明
(*) マレーシア連邦土地統合整備公団
スランペラでの奉仕プロジェクト(プール建設) ホームステイ
- 3/31 スランペラの種もみ工場・ほ場・オイルパーム農園見学
青年海外協力隊員による現地活動説明
スランペラでの奉仕プロジェクト(プール建設)
さよならパーティ ホームステイ
- 4/1 スランペラ→イポー
スター校訪問
(日本語教師隊員によるスター校の説明・日本語を受講
している学生との交流会) ホテル泊
- 4/2 イポー→クアラルンプール
クアラルンプール市内視察 ホテル泊
- 4/3 さよならパーティ
クアラルンプール空港発 福岡経由 鹿児島空港着
解団式



祝30回記念

徳永 絹代（旧姓 三浦）（第2回マレーシア派遣）



本事業の30回記念、おめでとうございます。

今から30年前、第2期生としてマレーシアの体験事業に参加しました。当時高校生だった私には、初めてのアジアの地が何もかも新鮮で興味深く、様々な刺激を肌で感じることができました。そして、日本とは違うマレーシアの文化や人々に触れ、私のその後の人生に大きく影響を与えてくれました。

研修の中で一番心に残っているのは、やはり村でのホームステイです。ちょうどラマダンの時期と重なり、私も挑戦しましたが半日も続きませんでした。水が飲めなかったのはとても辛かったです。その他にもお風呂場はトタンに囲まれていて、体に布を巻いての水浴び。トイレは穴が空いた和式トイレ。食事も右手を使い、床の上。生活習慣や言葉の違いに奮闘しながらも現地の生活を楽しみ、ホストファミリーの笑顔と温かさに包まれたホームステイでした。村を離れる時はみんなで号泣したのを忘れられません。

この事業に参加してからは、すっかりマレーシアに心を惹かれ、マレーシアと聞くだけで心が躍ります。高校卒業後は、マレーシアやアジア諸国を何度も訪れました。鹿児島でも国際交流イベントに参加したり、鹿児島大学の留学生と交流したり、海外への憧れが更に膨らむばかりでした。また、夫の海外赴任に帯同し中国にも住んでいました。

この事業が私の人生の糧となり、この事業のおかげでいろいろなことに挑戦しながら視野を広げることができました。多感な高校生の時だったからこそ、得ることができた経験がたくさんあり、感謝の気持ちでいっぱいです。

この体験をぜひ我が子にも繋ぎたくて、第28期生としてスリランカに息子が、今回第30期生として私と同じマレーシアに娘が参加させて頂きました。親子でこんなに素晴らしい体験事業に参加することができ、幸甚の至ります。この事業がこれから先もずっと続き、たくさんの中高生に海外へ飛び出してほしいと心から願っています。Terima kasih.



一生を変えた1週間

山之内 卓也（第2回マレーシア派遣）



高校1年生の時、「若いうちに少しでも世界を見ておきなさい。」という知人のアドバイスを受け、応募したのが第二回青少年海外協力体験事業でした。10倍程度の倍率の選考会を経て、事前研修を受け、派遣されたマレーシアは、それまで社会で習う一単語でしかなかったものから、自分の一生を変えたマレーシアとなりました。派遣された私達は、そこで様々な体験をさせて頂いていただきました。

国立中高等学校 STAR という学校で日本語教師として活躍する隊員の様子を見学し、マレーシアの未来を担う若者たちが日本との懸け橋に育ってくれることを夢見て頑張る隊員の姿に感銘を受けました。また、ペラ州のフェルクラと呼ばれる農業支援施設で農業改善に取り組む隊員の姿の仕事について学び、作物の収量を上げようと熱心に取り組むその様子に感動しました。

スランベラと呼ばれる農村で3泊4日のホームステイをした際には、突然のスコールに打たれ、泥だらけになりながら、自然の力強さに驚きました。中でも、現地で「ブワサ」と呼ばれる断食の体験をしたことは、一生忘れられない思い出です。イスラム教徒である現地の人々は、日の当たる間飲食をせず、食べ物に感謝するという戒律を厳格に守っていました。敬虔なイスラム教徒は、つばさえも飲み込まないといわれています。

ちょうどその断食を経験する間、私達は協力隊のように現地の人々のお手伝いをしようということでプール作りの作業を行っていたので、飲まず食わずで、汗だく、ふらふらになりながら1日を終え、日没後に家族から頂いた飲み物は、本当に言葉に言い表せないほど有難く感じました。今でも喉を潤す感覚や生き返ったという心地、何か神々しいものを感じたことを覚えています。帰国後はもっと東南アジアのことやイスラム教の世界のことが知りたいと考えるようになり、国際政治や開発問題などに興味を持ち始め、もっと様々な国の人々と交流したいという気持ちが高まり、学生時代には大学の留学生の住む寮のチューターという仕事を3年間行いました。また、音楽を通して様々な国を知りたい、紹介したいという気持ちがあり、趣味で多国籍バンドを結成してバンド活動もすることとなりました。今は、教員をしながら、子供たちと国際理解などについても学んでいます。全ての始まりはあのマレーシアでの一週間です。

多感な高校時代に異文化に触れ、様々な開発問題に触れる体験を提供していただいたことに心から感謝です。テリマカシ……。



第3回	平成5年(1993) 7/23(金)～7/30(金)	マレーシア (クア, テラガアイール)
-----	-------------------------------	---------------------

〔派遣団員〕

安慶名 龍巳	片泊中学校
上岡 正吾	高山中学校
濱田 孝子	日当山中学校
三窪 絵理	明和中学校
加藤 剣竜	志布志高等学校
三島 隆志	鹿児島中央高等学校
中園 徹	鶴丸高等学校
福永 葵	錦江湾高等学校
中野 葉月	れいめい高等学校
福川 真理子	加世田女子高等学校
10名	

〔同行者〕

弓場 秋信	青年海外協力隊県OB会顧問
橋口 和典	青年海外協力隊県OB会事務局長
斎藤 紀子	青年海外協力隊県OB会
宮園 夏美	青年海外協力隊県OB会
吉岡 真樹	鹿児島県国際交流協会
湯田 澄春	KTS鹿児島テレビ放送出水支局長
柴立 浩一	南日本新聞 社会部



7/23	結団式(鹿児島空港出発ロビー内) 鹿児島空港発 クアラルンプール空港着	ホテル泊
7/24	クアラルンプール空港発 クチン空港着 クチン市内視察 サラワク博物館見学/サンデーマーケット見学 青年海外協力隊員(7名)との懇談会	
7/25	テラガアイール村で歓迎式・ホームステイ 協力体験活動(養鶏プロジェクト) テラガアイール小学校訪問・記念植樹	ホームステイ
7/26	学生及び村人とのスポーツ交流 村内自治会(JKKK)による村内活動紹介及び 村落開発プロジェクト概要説明 村内記念植樹 現地中学校(SMK Matang I)との交流会	ホームステイ
7/27	土地開発省主催晩さん会 JICAプロジェクト視察(SARAWAK UMUM HOSPITAL) 病院施設の見学及び説明 JICAプロジェクトの説明 JICAプロジェクト専門家(3名)との懇談会	ホームステイ
7/28	お別れパーティ クチン空港→クアラルンプール空港着	ホームステイ
7/29	JICAマレーシア事務所を表敬訪問 マラッカ視察 ～鹿児島・ポルトガル友好450周年にちなむザビエル ゆかりの地～ (ゴム園, セント・ポール教会, サンチャゴ砦, マラッカ海峡)	ホテル泊
7/30	クアラルンプール空港発 鹿児島空港着 解団式	





音楽隊員としてキルギスへ 濱田孝子（第3回マレーシア派遣）

この度は体験事業 30 回記念おめでとうございます。
私が体験事業に参加したのは体験事業が第3回で、当時中学 3 年生でした。
初めての海外、初めてのホームステイ、初めてのマレーシア語…と不安と緊張が
混じった初めて尽くしでした。

私達が、まず訪れたのはテラガイール村という首都からだいぶ離れた村でした。盛大な歓迎式を受けホームステイ先へ引き取られ、5 日間ほどお世話になりました。今思うと、どなたがこの家の主人なのかもわからないくらい毎日入れ代わり立ち代わり人が来ていたように思います。それだけ日本人が珍しかったのだと思います。

部屋は仕切られてはいるものの上の部分は隙間があり、天井の 1 つの電気を 2 つの部屋で共用で使うという生活でした。洗濯機も無く、水も水道ではなく貯水を使い、もちろんクーラーも無し。それでも暑いので朝・昼・晩のマンディー（水浴び）を勧められたのが思い出深いです。

朝になるとニワトリの声より大きいイスラムのコーランが流れ、急に降るスコールではトタン屋根が壊れそうなほどでした。

日本と程遠い生活の中で過ごせたのも、言葉は通じなくても一生懸命コミュニケーションをとってくれようとする村の方の心遣いを感じたからなのだと思います。

その後、音楽教室の講師になるわけですが、20 代後半「協力隊として活動してみたい、応募するのは今なのは？」と思い切って協力隊に応募しました。

その後、音楽隊員として中央アジアのキルギスに派遣されることになります。

体験事業でお会いした青年海外協力隊員の協力体験活動やお話に影響を受けて、数年後には自分も協力隊の隊員となってキルギスに行くことになるとは中3の私には想像もできていなかったことでしょう。

まさに、体験事業の時に見学させていただいた隊員の方々の生き生きとした姿が何年も頭の片隅に残っていたのだと思います。

体験事業の歴史の中では、世界情勢が不安定だったり、疫病が流行ったりしてやむなく見送った年もあったと記憶しております。

それでも、続けていられるのは弓場さんはじめスタッフのみなさんのおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。

同年代のほぼ初対面の中高生が異国の地で現地の方々の生活に触れ、様々な体験をすることは貴重な経験であり、それからの自分の価値観、創造力に大きな影響を与えたことは間違いのないと言えます。

これからも、体験事業の継続と益々の発展を願っております。



第4回

平成6年（1994）
8/1（月）～8/7（日）

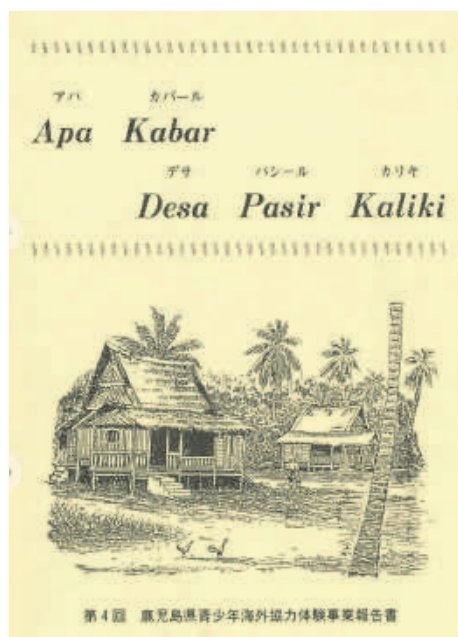
インドネシア（パシール、パシールカリキ）

〔派遣団員〕

河野 友亮	出水中学校
貴島 祐	志學館中等部
今村 沙織	北指宿中学校
倉岡 智恵子	東谷山中学校
安栖 尚幸	鹿児島第一高等学校
向江 智生	加治木高等学校
松元 隆浩	市来農芸高等学校
内藤 真帆	甲南高等学校
松村 むつみ	国立南九州中央病院附属 鹿児島看護学校
9名	

〔同行者〕

小城 善政	県青年海外協力隊を支援する会理事
永田 良松	青年海外協力隊県OB会
栄 めぐみ	青年海外協力隊県OB会
玉泉 和江	KKB鹿児島放送
田中 優子	南日本新聞社
本田 秀昭	鹿児島県国際交流協会



- 8/1 結団式（鹿児島空港出発ロビー内）
鹿児島空港発 福岡経由 デンバサール空港経由
スカルノ・ハッタ空港着（ジャカルタ） ホテル泊
- 8/2 JICAインドネシア事務所表敬訪問
ジャカルタ市内見学
国立博物館／パティック工場見学
ハリム空港発（ジャカルタ） バンドン空港着
パシールカリキ村で歓迎式 ホームステイ
- 8/3 JICAプロジェクト視察(BB1)
種馬鈴薯の収穫体験 ホームステイ
- 8/4 現地高校(SMA BANDUNG 5)との交流会
ウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンター視察
（宇野隊員活動現場）
現地学生、IKA-JICAとの交流
「イ」点字印刷センター
（後藤隊員活動現場） ホームステイ
- 8/5 Bio Farma 訪問
チコレ牧場協力体験
牛舎の清掃体験
JICA、JOCV隊員との懇談会
お別れパーティ ホームステイ
- 8/6 バンドン空港発 ハリム空港着
スカルノ・ハッタ空港発 デンバサール空港着
デンバサール市内見学 ホテル泊
- 8/7 デンバサール空港発 福岡経由 鹿児島空港着
解団式



テリマカシ

貴島 祐（第4回インドネシア派遣）

「青少年国際協力体験事業30回記念誌を作ることになったから寄稿をお願いします」とご連絡をいただいて、私が参加してから約30年の年月が経っていることに気づき、驚きました。今では忙しい日常の中でこの事業での経験を思い出す機会もあまりなくなっていました、私の人生を大きく左右した体験であったことは事実です。

そして私の充実した今の活動の原点は間違いなくこの青少年国際協力体験事業であったこともはっきりと思い出し、こうして振り返る機会を頂けたことを大変ありがたく思います。当時の感想文もまだ大事にとってあるのですが、それを読んで詳細を思い出すのはこの寄稿を終えてからにして、30年経った今でもいまだに強く覚えていることをせっかくなので書かせていただきたいと思います。

私は中学3年生の時に第4回青少年国際協力体験事業でインドネシア・パシールカリキ村へ派遣して頂きました。私にとっては初めての海外、そして初めてのホームステイで終始緊張していたことが思い出されます。海外どこか、鹿児島から出たことすらほぼなかった私が、故郷から遠く離れた国の村に行き、全く理解できない言葉が飛び交うホストファミリーの輪に一人ぼつと投げ込まれた初日の心細さは今でも忘れることができません。

素手で食べたそれまで経験したことない味（当時の私にとっては強烈な匂いと味）の現地料理、電気もなく真っ暗な中で寒さに震えながらのマンティ（水浴び）、どこに行っても飾ってある夢に出てくるくらい怖い（と当時の私は感じていた）顔の変なおじさんの写真（いま思えばスカルノ元大統領だったかもしれません。）、そして早朝に鼓膜が破れそうになるくらいの爆音で流れてくるコーラン。

「トラウマしかないんかーい！」と突っ込まれそうですが（笑）、決してそういう意味ではなく、日本では想像もできなかった異国の文化を実際に体験して得たこれらの強烈な経験こそが、私の世界をいっきに広げ、人間的にも大きく成長させてくれました。

自分の知っている世界なんてこの広い世界の中では本当に小さく、自分の常識や価値観なんて世界が変われば何の役にも立たないんだということを思い知らされました。そして自分の持っている枠に捉われず、常にその枠の外へ関心を抱くことを意識するようになり、その結果どんな環境に置かれたとしてもいち早く「適応」して変化を楽しむことが結果的に自分の糧になることを10代で気づくことができたのはその後の私の生き方に大きな影響を与えてくれたと思います。

「小児科医になりたい」という気持ちは幼少時からあったのですが、非常にヤンチャで不真面目な学生だったので成績も芳しくなく、当時の学校の先生には「お前みたいな奴が医者とか無理。ましてや国立大学医学部なんて1万年かかっても無理。」と言われていました。しかしたった1週間のインドネシア生活で培われた強靱な精神のおかげか何を言われても決して諦めることなく、1万年かかるはずが1年で医学部に進学を果たすことができました。いま振り返ってみると周りの大人にはチャランポランな人間に見えていたことは十分に理解できるのですが、自分の夢に対する覚悟のようなものがインドネシアで確実に育まれていたので、受験モードに入ってから学習意欲はおそらく周囲には想像ができないくらい凄まじかったと我ながら思います。

学生時代には数十カ国の国々をひとりでバックパッカーとしてまわり、カンボジアの中学校で英語教師のボランティアをしていたこともあります。医師になってからもネパールの孤児院に訪問したり、ラオスの小児医療ボランティアに携わるなど常に国際協力という軸を持って活動してきました。医学部を卒業し、小児科専門医を取得後は救急救命士を養成する大学で教授職を勤め上げ、38歳の時から現在に至るまで大阪市福島区で小児科クリニックを経営しております。また書道教室も運営しており、子どもから大人まで多国籍な方々に書道を指導しています。

国際協力からは徐々に距離をとっていったのかと思われるかもしれませんが、実はそういうわけではなく、日本に住んでいる外国人や観光で来た外国人も安心して医療が受けることができるように私は多くの外国人患者さんも私のクリニックで積極的に受け入れて診療する毎日です。

多い時は日本人患者に混じり、1日50人近くの外国人患者が受診することもあります。母国語が思うように通じない環境で不安な気持ちを体験したことがある私だからこそ、その不安を共有し、多くの外国人に医療や教育を通して安心を届ける仕事をしており、これも国際協力のひとつだと思っています。

私生活ではこの事業で同期だった女性と20年前に結婚し、彼女との間に生まれた長女が今年成人いたしました。私にとっては何よりもかけがえのない存在であり、これもまたこの事業に参加しなければ得られなかったものかもしれないと思うと鹿児島県青少年国際協力体験事業に対する思い入れは深いものがあります。

インドネシア語で覚えている言葉は残念ながらほとんどないのですが、なぜか一つだけ忘れることができなかった言葉「テリマカシ」をタイトルに付けさせていただき、この寄稿を締めさせていただきます。



第5回	平成7年(1995) 7/30(日)~8/6(日)	マレーシア(コタバル)
-----	------------------------------	-------------

〔派遣団員〕

佐々木 啓孝	鴨池中学校
川崎 温子	桜丘中学校
日高 あずみ	日当山中学校
奈良 憲佑	甲南高等学校
上萩原 純一	国分高等学校
天瀬 毅	宮之城農業高等学校
坂元 祥子	鹿屋女子高等学校
田平 奈津美	中種子高等学校
永山 桂子	鹿屋農業高等学校
東村 朋子	原田学園看護専門学校
10名	

〔同行者〕

福迫 正倫	鹿児島県国際交流協会KAPIC所長
橋口 和典	県青年海外協力隊を支援する会監事
西村 直人	青年海外協力隊県OB会
宮園 夏美	青年海外協力隊県OB会
有村 英人	KYT鹿児島読売テレビ報道制作部
平川 順一郎	南日本新聞社社会部



7/30	結団式(鹿児島空港出発ロビー内) 鹿児島空港発 クアラルンプール空港着	ホテル泊
7/31	JICAマレーシア事務所表敬訪問 クアラルンプール空港発 コタバル空港着 青年海外協力隊員勤務地の学校訪問 (Sekolah Tengku Muhammad Paris Petra) 学校にて歓迎会・交流会	学生寮泊
8/1	協力体験事業:学校にて授業参加・交流 日本軍上陸地点サバ(Sabak)海岸視察 ホストファミリーとの対面式 (Sekolah Menengah Bachok)	ホームステイ
8/2	ホストファミリーとのフィールドワーク クランタン青年会による歓迎式典	ホームステイ
8/3	ホストファミリーとのフィールドワーク	ホームステイ
8/4	お別れパーティ コタバル出発 クアラトレンガヌ着 トレンガヌ州議会議長表敬訪問・歓迎式 クアラトレンガヌ市内のナイトマーケット視察	ホテル泊
8/5	JICAシニア協力専門家プロジェクト視察 (Permint Suterasemai Sdn, Bhd.) JICAプロジェクト(東南アジア漁業開発センター)視察 クアラトレンガヌ空港発 クアラルンプール空港着	ホテル泊
8/6	PAMAJAとのお別れパーティ クアラルンプール空港発 鹿児島空港着 解団式	ホテル泊



「私にできる国際協力」を追いつけて

西嶋温子（旧姓：川崎）（第5回マレーシア派遣）



●派遣事業に参加して

「私にできる国際協力」これは私が本事業に参加した2年後に書いた JICA 中学生エッセイコンテストのタイトルだ。

12歳の私は本事業でマレーシアのクランタン州に派遣された。初めての沐浴、紙のないトイレ、慣れない食事を経験し、ホームシックになり思わず涙が止まらない日があった。ホストファミリーには理由を言えず咄嗟に頭痛だと嘘をついてしまったことで家族総出の看病となり、申し訳ない気持ちの半面、人の温かさに触れ、本当の豊かさとは何かを突き付けられた。「異文化を学び、途上国を助ける仕事について身近な人に伝えることが今の自分にできる国際協力ではないか」とエッセイに残していた。

●その後の歩み

海外への興味が強く、高校生になると、ホームステイのホスト側となり、香港やオーストラリアの留学生を受け入れた。

大学時代は中国の孤児院でボランティアに参加、ニュージーランド人との同居、1年間イギリスに留学したり、色々な国をバックパッカーで旅をして回ったりと見識を広げられたことは本事業の参加経験による影響が大きかったように思う。

社会人になった後もやはり国際協力を専門的に学んでみたいと大学院に進み国際支援や国際理解教育について学んだ。

その後は結婚・子育てに追われる毎日であつたという間に10年が経った。子育てをしながらもふと「結婚する前に思い切って海外に飛び出したらどうなっていたかな」と頭をよぎることがある。

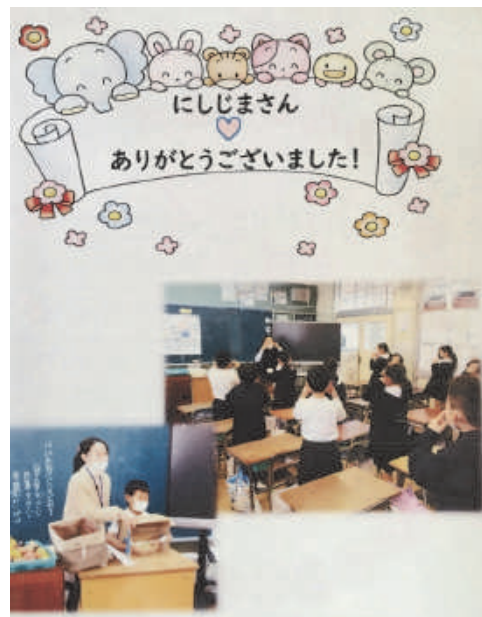
今は地域の小学校で2年生に月に一度英語を教えるボランティア活動をしている。英語を教えるときには私自身が英語を使って世界中に友達ができたこと、他の国の考えや違いをもっと知りたいと思う気持ちが英語を勉強するきっかけになったことなどを話すようにしている。また、ご近所で外国の方がいたらサポートは必要ないかと声をかけたりすることもある。

今の私は若い時に描いていた理想の私とは違うかもしれない。でも、この度、執筆のご依頼をいただき、改めて顧みると、本事業を経験し、「私にできる国際協力」をずっと探し続けてきたのだと気づくことができた。

今も派遣時に学んだマレー語の挨拶や歌は不思議と口ずさめるし、お世話になったホストファミリーとはSNSで繋がり、お互いの家族の近況報告やテレビ電話をしたりもする。数年内には我が子と彼らを訪ねてみようと思っている。

私の人生に彩りを与えてくれたこの事業、ご支援くださった方々に感謝申し上げますとともに今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

（山口県下関市在住）



第6回

平成9年（1997）
7/27(日)～8/3(日)

マレーシア(クアラルンプール、パリットムントリー)

〔派遣団員〕

荒木 瑞穂	玉龍高等学校
田邊 優子	鹿児島女子高等学校
上蘭 香奈	鹿児島女子高等学校
藤田 尚子	串木野高等学校
外蘭 舞子	串木野西中学校
大迫 景子	伊集院高等学校
田中 智子	伊集院高等学校
宇都 怜央奈	甲陵高等学校
野元 由香里	吹上高等学校
今屋 舞利江	吹上中学校
有蘭 舞	川辺高等学校
11名	

〔同行者〕

弓場 秋信	県青年海外協力隊を支援する会事務局長
宮蘭 夏美	青年海外協力隊県OB会
宮崎 剛	鹿児島県国際交流協会
税所 朋子	MBC南日本放送
柴山 良春	鹿児島新報



- 7/27 結団式（鹿児島空港出発ロビー内）
鹿児島空港発 福岡経由 クアラルンプール空港着 **ホテル泊**
- 7/28 JICAマレーシア事務所表敬訪問
タイピンへ移動（貸切バス）
タイピン市主催の歓迎会、ホストファミリーとの対面式
パリット・ムントリーで歓迎式 **ホームステイ**
- 7/29 ホームステイ先の農園見学
マタン地区マングローブ沼地説明・植樹、木炭工場見学
タイピン市長表敬訪問、歴史、市政概要説明
タイピン市内・動物園見学 **ホームステイ**
- 7/30 手芸センター見学・実習
バトクラウ農業開発施設、博物館見学
カンボン（村）主催のパーティ **ホームステイ**
- 7/31 チャカットイボールの「農園レクリエーション」見学
モクタランダサイエンス（MRSM）マラ校訪問・交流
さよならパーティ **ホームステイ**
- 8/1 クアラカンサーへ移動（貸切バス）
隊員活動現場－障害児デイケアセンター訪問・交流
クアラルンプールへ移動（貸切バス）
JICAマレーシア事務所で青年海外協力隊員との交流会 **ホテル泊**
- 8/2 隊員活動現場－スコーラセールプティス（SSP）校訪問・交流
クアラルンプール市内見学 **ホテル泊**
- 8/3 クアラルンプール空港発 福岡経由 鹿児島空港着
解団式



言葉は違ってても

江崎優子（旧姓：田邊）（第6回マレーシア派遣）

高校に入学して間もない頃、一枚のプリントが配られた。国際協力体験事業の派遣団員募集だった。今思えば、文化も言葉も違う国にホームステイをしようと思ったなと思う。

私たちは女性11人でマレーシアへ出発した。活動はみんなで行うが、ホームステイは1人1家庭。頼れる人はいない。事前に勉強したマレー語も自己紹介くらい。あとはプリントに印刷された日常会話の例文。不安しかった。

私のホストファミリーは、パパとママと子どもが3人の5人家族だった。パパは英語を話せたけど、ママと子どもたちはマレー語のみ。中学校で勉強した英語と、マレー語の例文プリント、ジェスチャーが私のコミュニケーション手段。

初日の夜、夕食をとり、日本や鹿児島のことなどを自分なりに紹介した。遅くなってきてパパが、「眠たくないですか？」と聞いてくれたが、子どもたちもみんなまだ起きていたので「大丈夫。」と答えた。結局、その日寝たのは夜中二時をまわっていた。次の日、村の人たちみんなが集まって夕食をとっていた時、「あなたのパパはあなたがいつ寝たいとか、どうしたいとかが分からないと心配していたよ。」という事を聞いた。私はショックだった。自分なりに頑張っていたつもりだったけど、それは違っていただけに気付いた。

文化も言葉も違うところに自分一人で飛び込んだ気でいたけど、それはホストファミリーも一緒だった。日本人の私が家に来て戸惑うのは当然だ。もっと自分の気持ちを伝えなきゃと思った。それから自分の事はもちろん、質問もたくさんした。

たった4泊5日だったけど、心が通じ合えたと思う。最初の不安が嘘のように、別れはとても寂しかった。また会えると信じて、帰国した。

それから何年かして、父の職場で、マレーシアから鹿児島へ研修に来た方のホストファミリー募集の話があった。私がホームステイさせてもらった恩返しになればと、ホストファミリーを希望した。私は張り切った。積極的に話をした。もちろんマレー語は話せないで、英語の辞書とマレー語の辞書二冊を使って。時間はかかったけれど、楽しく会話ができた。

言葉が違うつい身構えてしまう。でも自分のことを伝えたい、相手のことを分かりたいという気持ちが大切だと学んだ。

またいつか、ホストファミリーに会いにいきたい。



第7回

平成10年(1998)
7/26(日)~8/2(日)

マレーシア(クチ), テラガアイール

〔派遣団員〕

前岡 圭太	鹿児島玉龍高等学校
吉村 佳奈	鹿児島玉龍高等学校
牧田 瑛樹	鹿児島商業高等学校
中原 麻里	大口高等学校
北村 由貴	国分南中学校
和田 ありさ	国分高等学校
畑中 ルミ	大口高等学校
坂元 佑佳	重富中学校
野村 育代	蒲生中学校
国生 亜由美	加治木高等学校
猪目 香	鳳凰高等学校
安藤 容未	鹿児島城西高等学校
田口 裕子	牧園高等学校
永山 雅幸	栗野中学校
二渡 和笑	鹿児島工業高等専門学校
海江田 彩	牧園中学校
山内 千花	隼人中学校
井手上 直樹	日当山中学校
赤石 直子	福山中学校
富永 克弘	牧之原中学校
20名	

〔同行者〕

窪田 義次	鹿児島県国際交流協会 事務局長
宮蘭 夏美	青年海外協力隊県OB会
酒井 マリ	県青年海外協力隊を支援する会
宮崎 剛	鹿児島県国際交流協会
大城 哲也	KTS鹿児島テレビ放送

- 7/26 結団式(鹿児島空港国内線ロビー内)
鹿児島空港発 福岡経由 クアラルンプール空港着 **ホテル泊**
- 7/27 JICAマレーシア事務所表敬訪問
クアラルンプール空港発 クチン空港着
テラガアイール村へ移動
ホストファミリーとの対面式 **ホームステイ**
- 7/28 青年海外協力隊 遠藤奈津子隊員(日本語教師)活動視察
@SMSクチン中高等学校
テラガアイール村の歴史、市政概要説明 **ホームステイ**
- 7/29 テラガアイール村で交流
マレーシア料理体験
村の広場に記念植樹
村内の小学校で柵のペンキ塗り、花壇づくり
テラガアイール村との文化交流会 **ホームステイ**
- 7/30 青年海外協力隊 江頭典子隊員(看護師)活動視察
@サラワク州社会福祉局老人ホーム
ワイルドライフセンター見学
クチン市内見学
テラガアイール村の人々と食事会 **ホームステイ**
- 7/31 テラガアイール村お別れセレモニー
クチン空港発 クアラルンプール空港着 **ホテル泊**
- 8/1 マラッカ視察(1999ニザビエル鹿児島上陸450周年)
(セントポール教会、サンチャゴ砦、マラッカ海峡など) **ホテル泊**
- 8/2 クアラルンプール空港発 福岡経由 鹿児島空港着
解団式



* * 報告書アート * * * Part 1

各年次の報告書には、派遣団員等が描いた素晴らしいアート作品も掲載されています。今回、この記念誌において、その一部を改めてご紹介します。



第15回（平成18年度）マレーシア派遣団員
田畑梓さん



第19回（平成22年度）インドネシア派遣団員
奈良迫ひかるさん

第8回

平成11年（1999）
7/30(金)～8/5(木)

タイ(アユタヤ, ルンカーオ)

〔派遣団員〕

福富 晴夏	鹿児島女子高等学校
大窪 綾	鹿児島玉龍高等学校
南谷 友	鹿児島玉龍高等学校
前之園 やよい	指宿高等学校
上釜 理沙	加世田常潤高等学校
西 佳乃	鹿児島中央高等学校
大迫 恭美	笠沙高等学校
西野 健太郎	知覧中学校
村方 直己	知覧中学校
9名	



〔同行者〕

弓場 秋信	県青年海外協力隊を支援する会事務局長
塚田 拓	青年海外協力隊県OB会
田原 尚子	鹿児島県国際交流協会
前田 義人	南日本新聞社
樺山 美貴子	KKB鹿児島放送

- 7/30 結団式（鹿児島空港国際線ターミナル）
鹿児島空港発 香港経由 バンコク着 ホテル泊
- 7/31 オリエンテーション（TVS）
アユタヤへ移動
アユタヤ遺跡見学
ルンカーオ村へ移動
ホストファミリー対面式 ホームステイ
- 8/1 ルンカーオ村内で交流・協力活動
（タイ文化体験／換金作物プロジェクト／伝統工芸見学
スポーツ交流） ホームステイ
- 8/2 青年海外協力隊園田隊員（日本語教師）の活動視察
・生徒との交流
@ラチャバット大学（ロップリー）
ルンカーオ村内の学校を訪問・レクリエーション
（タイのデザートづくり） ホームステイ
- 8/3 青年海外協力隊上野隊員（養護教諭）の活動視察
@養護学校（ロップリー）訪問
ルンカーオ村内で日本料理紹介など
フェアウェルパーティ ホームステイ
- 8/4 JICAバンコク事務所表敬訪問
タイ市内観光、反省会など ホテル泊
- 8/5 バンコク空港発 香港経由 鹿児島空港着
解団式



2つの後悔を経て 村方 直己（第8回タイ派遣）



平成11年の夏休みタイ国ロブリー県ルンカーオを訪問したのは中学三年生の時でした。今思い出しても素晴らしい体験をさせていただいたと、色あせることはありません。

そんな中2つ後悔していることがあります。

1つは、ステイ先で毎朝毎晩食べきれないほどのごちそうを、半分も手を付けられずに残したことです。

もう1つは、村で知り合った小学3年生の女の子の手紙に返事を出さなかったことです。

ホームステイは村の一大イベント。子ども達が不便しないよう環境の整った「精鋭ファミリー」が受け入れてくださったはず。

特別な時にしか食べられないような料理を振る舞っていることが予測できます。きっとファミリーの子たちも驚くような料理です。

毎日10皿くらい料理で私はサラサラしたお米とグリーンカレーと鳥の揚げ物と野菜サラダに半分口をつけ、他を残しておりました。

当時の私は口に合うか合わないかで判断しており、残った料理を見たファミリーは悲しかっただろうと思います。

帰国後、ステイ先の近所に住む女の子から手紙が届きました。かわいいイラストとちょっとしたシールが貼っており拙い字で書いておりました。当時の私は返事を出そうと試みたものの翻訳が難しいことを理由に途中で断念してしまったのです。

今思えば翻訳など気にせず自分の言葉で返事を出していれば良かった、ずっと返事を待っていたのではないかと思います。

現在38歳の私はホテル業、観光バス運転士、旅行プランナー、添乗員を経て、昨年、令和5年に独立しました。起業の理念は「見えないものを見せる」です。

メディアや仕事や旅行でタイに触れるたび、二つの後悔を感じておりますが、その一方で大きな愛も感じており、まさにこの経験があるからだと確信しております。

エンタメやリトリートを楽しむことも旅行には欠かせませんが、歴史やそこに至った想いや生活に触れることでも人生が拓く瞬間が多々あるようです。

私は観光を通してそのことを伝えていけるよう、ここで得た経験も一つの柱として今後の社会に貢献していくつもりです。

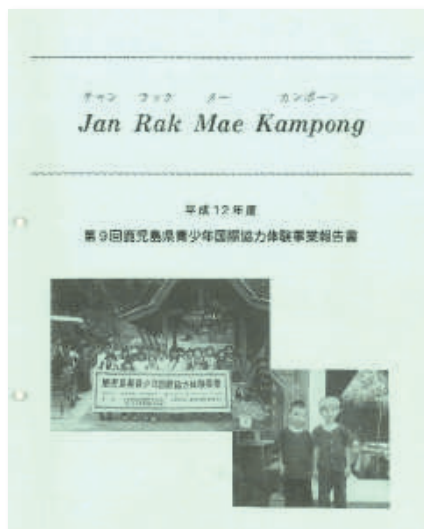


〔派遣団員〕

岩川 佳代	鹿児島玉龍高等学校
森 陽子	鹿児島女子高等学校
山元 雄貴	鹿児島商業高等学校
牧田 めぐみ	鹿屋女子高等学校
園田 有美	国分高等学校
中神 沙弥香	開陽高等学校
大山 千代美	垂水高等学校
肥後 朋子	祁答院中学校
福岡 奈々恵	財部高等学校
柳田 香織	財部高等学校
川畑 亜利沙	末吉中学校
堀内 みなみ	末吉中学校
宮原 亜弥	南之郷中学校
南 佐貴子	鹿屋中央高等学校
14名	

〔同行者〕

溜池 秀美	青年海外協力隊県OB会会長
酒井 マリ	県青年海外協力隊を支援する会
森永 靖志	鹿児島県国際交流協会主査
高木 優美	青年海外協力隊OV
寺原 公睦	南日本新聞社政経部記者
田中 省吾	KYT鹿児島読売テレビ制作部副部長



7/24	結団式(鹿児島空港国際線ターミナル) 鹿児島空港発 香港経由 バンコク着	ホテル泊
7/25	JICAタイ事務所訪問 TVS事務所訪問 バンコク空港発 チェンマイ空港着 メーカンボン村へ移動 ホストファミリーと対面式	ホームステイ
7/26	寺院での体験活動 寺院での朝食 ホストファミリーと村周辺の視察 メーカンボン小学校訪問 (生徒たちと文化、伝統芸能などの交流)	ホームステイ
7/27	ブラオ地区を訪問 青年海外協力隊 藤田可奈隊員(村落開発普及員)活動視察 @ブラオ社会開発支援センター	ホームステイ
7/28	メーカンボン村で交流 Mae On sub地区を訪問 青年海外協力隊 鈴木宏紀隊員(植林)活動視察 @チェンマイ苗畑センター メーカンボン村での協力活動体験	ホームステイ
7/29	お別れパーティ チェンマイ市内観光	ホームステイ
7/30	チェンマイ空港発 バンコク空港着	ホテル泊
7/31	バンコク市内観光 バンコク空港発 香港経由 鹿児島空港着 解団式	ホテル泊



＊ ＊ 報告書アート ＊ ＊ ＊ Part 2



第20回（平成23年度）マレーシア派遣団員

豊留春菜さん



第23回（平成26年度）カンボジア派遣団員

今村安里さん

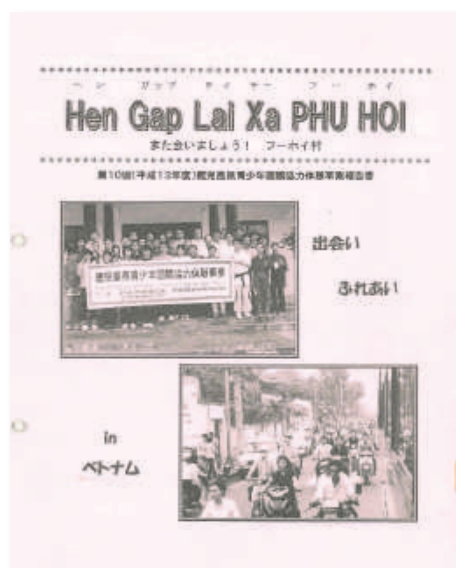
〔派遣団員〕

平尾 彩	鹿児島高等学校
為藤 弘子	武岡台高等学校
水流添 秀行	鹿児島玉龍高等学校
塩入 里美	出水高等学校
永家 可奈子	出水高等学校
山之内 真恵	出水高等学校
上野 絵莉	加世田常潤高等学校
菊野 咲	国分南中学校
前田 正輝	鹿屋農業高等学校
千竈 智也	祁答院中学校
坂口 あゆみ	祁答院中学校
岩元 明子	鹿児島純心女子高等学校
今村 圭佑	溝辺中学校

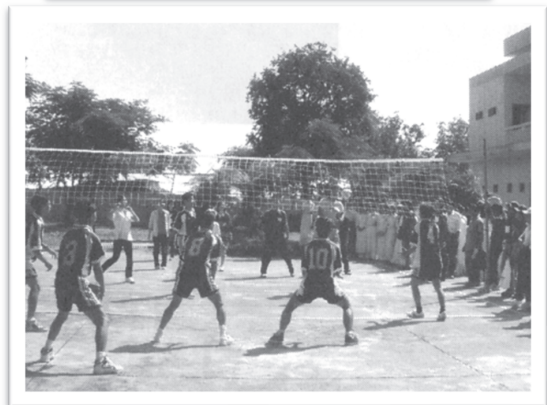
13名

〔同行者〕

弓場 秋信	県青年海外協力隊を支援する会事務局長
浜崎 研	鹿児島県国際交流協会事務局長
川崎 久美	青年海外協力隊ケニアOV(看護婦)
丸野 里美	青年海外協力隊カンボジアOV(小学校教師)
竹村 志麻	MBC南日本放送ニュースキャスター
友岡 政信	南日本新聞社地域報道部記者



- 7/20 結団式（鹿児島空港国内線ターミナル）
鹿児島空港発 関西空港経由 ホーチミン空港着 ホテル泊
- 7/21 歓迎セレモニー
Dong Nai省博物館見学
Nguyen Huu Ganh寺訪問
Rose Garden内釣堀で魚釣り
昼食会（人民委員会、議会関係者）
Bien Hoa市孤児院、工場団地見学
Phu Hoi村ホストファミリーとの対面式 ホームステイ
- 7/22 ホストファミリーと農作業など ホームステイ
- 7/23 戦争博物館見学
チョーライ病院訪問
- 7/24 伊藤企画調査員からJICA事業等の説明 ホームステイ
Nhon Trach高校訪問
文化・スポーツ交流(歌・舞踊・バレーボール)
メコン川支流クルーズ・えび養殖場見学
SAG森林公園内戦地訪問
記念植樹
Nhon Trach人民委員会歓迎会
キャンプファイヤー ホームステイ
- 7/25 青年海外協力隊 寺西順子隊員(システムエンジニア)
活動視察 @ホーチミン市総合科学図書館
青年海外協力隊員との懇談会・夕食会
(鹿児島出身山下隊員他10名)
- 7/26 ホーチミン空港発 機内泊
関西空港着 伊丹空港発 鹿児島空港着
解団式



青少年国際協力体験事業から20年の時を経て

山元 真恵（旧姓：山之内）（第10回ベトナム派遣）

「ベトナムホームチーミン〜…」気が付くと口ずさんでしまう「ホームおじさんの歌」。今から20年前、出国前に歌えるようになるまで何度も練習した思い出の曲だ。当時私は高校1年生だった。

あの頃はとにかく世界を自分の目で見てみたかった。どんな場所で、どんな人たちが、どんな暮らしをしているのか、とても興味があった。そんな中、学校に「青少年国際協力体験事業」の案内が届き、心が弾んだのを覚えている。



ベトナムではホームステイをしながらいろいろな施設を訪問したり、青年海外協力隊の方々のお話を聞いたりした。中でも忘れられないのは、ホームステイ先の家族と過ごした時間である。当時思春期真っ只中で、人間関係に悩むことの多かった私にとって、ホストファミリーと過ごす時間は、とても穏やかで温かく、優しい時間だった。あれほどまでに人と関わることに不安や疲れを感じなかったのは初めてだった。

それはホストファミリーだけでなく、親戚や近所の人達に対しても同じだった。それらはきっと日本ではなくなりつつある、お互いに助け合い、関わり合いながら生活していくという文化の中で培われた温かい人間関係なのではないかと思った。

ベトナムの病院を見学した際に、看護師さんから「経済的な理由で、体調が悪くてもすぐに受診せず、かなり症状が悪化してからやっと病院に来る人が多い」という話を聞いた。その病院では、日本では見たことのないくらい長い行列が病院の外にまで続いていた。日本では当たり前なのが当たり前にできない現状を目の当たりにし、将来私も国際社会に何らかの形で役に立てる人間になりたいと思った。そして大学進学後、教育の道を志した。

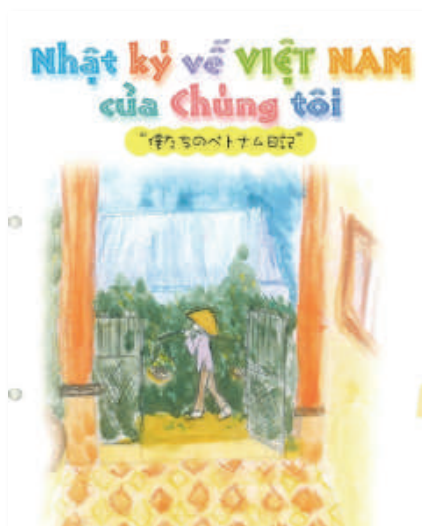
大学を卒業して約10年間、小学校の教員として働いた。国際理解や異文化学習などのときにベトナムでの体験を話すと子供たちはとても興味深く聞いてくれた。テレビやネットで得た情報とは違う、実際に見て感じた体験談は、他国や異文化をより身近に感じられたのではないだろうか。出産を機に教員は退職してしまったが、今も子供たちに関わる仕事を続けている。子供たちが国際社会に目を向け、差別や偏見をもつことなく、まっすぐに世界を理解しようとする姿勢を育てていけたらと思う。

「ベトナムホームチーミン〜…」さあ今日もこの歌を口ずさみながら、ベトナムの温かさを思い出し、優しい気持ちで子供たちと語り合いたいと思う。



〔派遣団員〕

竹原 有佳菜	鹿児島女子高等学校
上川路 太雅	鹿児島玉龍高等学校
岸田 萌	枕崎中学校
森 大樹	枕崎中学校
宮下 淳	枕崎中学校
満留 光史	八代工業高等専門学校
松本 康那	国分南中学校
柴 ひかり	垂水中学校
伊藤 沢美	加治木高等学校
内村 果林	陵南中学校
松元 啓祐	加治木高等学校
11名	



〔同行者〕

安樂 大	青年海外協力隊県OB会会長
大迫 浩美	鹿児島県国際交流協会
河野 理恵子	青年海外協力隊県OB会
谷口 博威	南日本新聞社
本田 恵	KTS鹿児島テレビ放送
日高 喜文	枕崎市企画調整課

- 8/4 結団式(鹿児島空港国内線ターミナル)
鹿児島空港発 福岡・ソウル経由 ホーチミン空港着
ホテル泊
- 8/5 Dong Nai省へ移動(貸切バス)
歓迎式(Bien Hoa市孤児院にて)
人民委員会と孤児院による合同歓迎式
ホームステイ(Tan Binh村)へ移動。途中、献花と参拝
ホストファミリーと対面式
ホームステイ
- 8/6 ホストファミリーと農作業など
ホームステイ
- 8/7 Tan Binh村近郊地域内の旧戦地「D地区」見学
ボートで「オ島」に渡り、昼食、伝統的的青年団ゲームなど
ホームステイ
- 8/8 ホーチミンへ移動
青年海外協力隊 舩田野子隊員(シンクロナイズ)活動視察
@スイミングクラブ
青年海外協力隊 柿沼恵美子隊員(栄養士)活動視察
@チョーライ病院
瀬戸口企画調査員からJICA事業の説明
Tan Binh村に戻り、交流会(出し物披露など)、
意見交換会
ホームステイ
- 8/9 ホーチミン市へ移動
ホーチミン市内視察・戦争記念館
青年海外協力隊員との懇談会(JICAベトナム南部支所)
・夕食会
機内泊
- 8/10 ホーチミン空港発 ソウル経由 鹿児島空港
解団式



青少年国際協力体験事業（ベトナム）がくれたもの～あれから 21 年～

上川路 太雅（第11回ベトナム派遣）



この度は青少年国際協力体験事業 30 回記念、心よりお慶び申し上げます。私は高校 1 年生のとき、平成 14 年の第 11 回目に参加しました。21 年経った今 37 歳になります。この度寄稿依頼を頂き、そんなに時間が経ったのかと驚くと同時に、この 21 年の間もずっと続いていたことをとても嬉しく思っております。

私が参加した第 11 回目はベトナムに行きました。私にとって初めての海外渡航でした。県内の色々なところから集まった 11 人の仲間と共に緊張とワクワクを胸に出発し、現地での様々な体験、ホストファミリーとの交流を通して得られた感動と学びは今も忘れません。現地で披露したベトナムの歌、ベトナムの方々の喜び顔、ホストファミリーと共に笑い合いながら食べた食事、青年海外協力隊員の活躍されていた姿、多くのことが思い出されます。

高校卒業後は大阪大学に入学し、60 人を率いる卓球部の主将を務めたり、溶接関係の研究をしたりと多くの友達と充実した日々を送りました。

その後自動車メーカーのマツダに入社し、現在はマツダで仲間と共に車体の接合関係の技術開発を行なっています。様々な環境で仲間と共に自分らしく、楽しく過ごせてこられた理由の一端はこの体験のお陰だと思っています。

また 4 年前、1 年間工場の生産ラインの立ち上げのため出向でタイに行きました。

現地の方々とのお話は、普通は基本英語ですが、工場の作業者はタイ語しか話せず、私は作業の方々の生の声が聞きたかったのでタイ語を勉強して、タイ語でコミュニケーションを図ることで良い関係づくりができました。決してお互いに全ては伝えられませんでした、心は繋がっていたと思います。きっと今まで深いところでこの青少年国際協力体験事業の体験が活かされてきたものと思っています。

今私には 2 人の子どもがいます。私の子どもにもこのような体験をさせて、たくさんの仲間たちと異文化に触れて、たくさんのことを学んでほしいと心から思います。

最後に今日までこの事業を実施し続けてこられた鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会、関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、この事業のさらなる充実、発展を祈念致します。



第 12 回

平成 15 年（2003）

SARS 及び鳥インフルエンザの影響により中止

〔派遣団員〕

久保 佑允	鹿児島第一高等学校
大石 真教	鹿児島第一高等学校
坂元 公枝	国分高等学校
茅野 瑞穂	枕崎高等学校
山口 美穂	池田高等学校
児玉 明子	甲南高等学校
川畑 知穂	開陽高等学校
木佐貴かおる	鹿児島女子高等学校
増留 愛香音	鹿児島東高等学校
9名	

〔同行者〕

月野 健一	鹿児島県国際交流協会専務理事
西村 直人	青年海外協力隊マレーシアOV(畜産)
村岡 佐世子	青年海外協力隊エジプトOV(看護師)
内田 直之	KYT鹿児島読売テレビ報道制作部



- 7/19 結団式（鹿児島空港国際線ロビー内）
鹿児島空港発 ソウル経由 クアラルンプール空港着
ホテル泊
- 7/20 クアラルンプール空港発 クアトレンガヌ空港着
チャプChapu村へ移動
ホストファミリーとの対面式
Leman/Bubu & Tangguk（伝統舞踊）の披露
ホームステイ
- 7/21 青年海外協力隊 来間寿史隊員（作業療法士）活動視察
@PDK Marang養護学校
青年海外協力隊 伊藤愛隊員（養護）活動視察
@Bukit Busar小学校
青年海外協力隊員との昼食会
チャプ村の学校で手作り運動会
ホームステイ
- 7/22 Matang高校報恩・交流
地域の幼稚園訪問・協力活動
ケニール湖見学
チャプ村でマレー系結婚式の模擬体験
ホームステイ
- 7/23 バティック工場見学
お別れ会（出し物披露）
ホームステイ
- 7/24 クアラルンプール空港発 マラッカへ
おはら祭 in マラッカに参加（ハントア通り）
ホテル泊
- 7/25 マラッカ視察 クアラルンプールへ移動
クアラルンプール市内観光
JICA/JOCV関係者、県人会との懇親会
クアラルンプール空港発
機内泊
- 7/26 ソウル経由 鹿児島空港着
解団式



国際協力体験事業を振り返って

川畑 知穂（第13回マレーシア派遣）

国際協力体験事業でマレーシアに渡航したのは、高校2年生の夏休みのことでした。

事前研修を受け、マレー語や歴史、文化など知識を学び、期待と不安の中、出発の日を迎えました。

マレーシアの第一印象は、華やかで明るいというもので、飛行機の窓から見たクアラルンプールの街の明かりがとても印象に残っています。

事前の学習で写真や言葉を自分の中で解釈してイメージしていたものが、現地で見、触れて、五感を使い体感していくことで発見や驚き、疑問など次々にいろいろな感情が巡り、実際に体験することはとても貴重であると感じました。



ホームステイ先では、生活の仕方、食事の食べ方、手の使い方など教わることがたくさんあり、言語でやり取りできない部分の意思疎通の方法を考え、体当たりでコミュニケーションを取っていたように思います。

川で水浴びをしたり、生っている果物を食べたり、ホームステイ先の子どもたちとはいろいろな遊びもしました。最終日は、別れがたく、心を通わせることができたことの嬉しさ、温かく迎えていただいたことへの感謝でいっぱいでした。

改めて、当時を振り返ってみると、教室で学んだことを実際に確かめる機会、異文化交流、海外で活躍されている青年海外協力隊のお話を伺う機会など、どれも貴重な体験であったと感じます。

また、国際協力体験事業を経て、マレーシアは好きな国となり、東南アジアについてもさらに友好的に感じるようになりました。このように感じていることもこの体験事業で得られた大切なことのひとつであると感じています。

